

【研究ノート】

伊藤仁斎の訓読法と

『論語古義』の成立過程に関する研究（一）

丸 谷 晃
片 岡
龍 一*

伊藤仁斎『論語古義』『林本』訳注（一）

【凡 例】

一、底本としては、天理大学附属天理図書館古義堂文庫所蔵『論語古義』『林本』の改訂前の原文を使用した。『林本』原文への書き入れは、『注釈A—稿本』に記した。

一、校訂は、同文庫所蔵『論語古義』『定本』、『正徳刻本』、『文政再刻本』などを参照し、明らかな誤りと判断されるもののみ訂正した。その場合、底本の文字は『注釈A—稿本』に記した。

一、『林本』にはほとんど句点が付されていない。原文の句点は校注者が加えたものである。

* 人文学部助教授 — 日本政治思想史

** 東海大学非常勤講師 — 東アジア思想史

一、「林本」にはほとんど訓点が付されていない。「定本」を参照し、校注者の判断によって読み下した。その場合、「林本」「定本」に付されている送り仮名はそのままカタカナで（例えば濁音は清音で表記されているが、そのまま清音で記した。ただし「寸」「ノ」「フ」などは「トキ」「シテ」「コト」などに改めた）、校注者の補った送り仮名、またもともと漢字で表記されていたものはひらがなで記した。なお、訓読に際して、三宅正彦『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』（思文閣出版、一九八七）序章四「訓詁法の問題」を参考にした。

一、常用漢字の存する字は、その字体を用いた。また、異体字は通行の字体に改めた。

一、「本文」とは「論語」本文のことを、「小註」とは一章のうち本文と本文の間に挿まれた部分の注釈を、「大註」とは本文が終わったあとで一字下げて書かれた部分の注釈を、「論註」とは大註が終わったあとさらに一字下げて書かれた部分の注釈を、「原文」とは上記以外の記述を、それぞれ指す。

一、「注釈A—稿本」は、「林本」に到るまでの諸稿本（古義堂文庫所蔵「第二本」「誠修稿本」「元禄九年校本」「元禄一六年定本」）に関する注釈をまとめて記した。この稿本の名称は「古義堂文庫目録」（天理大学出版部、一九五六）による。これらの原文を引用する場合は、読み易さの便宜を図り、通行の訓詁法による書き下し文を載せた。また「林本」への書き入れ、底本の校訂、「定本」（改訂前）との異同の主なもの等に関する注も、ここに記した。

一、「注釈B—主著」は、仁斎の主著に関する注釈をまとめたものである。『論語古義』『孟子古義』『大学定本』『語孟字義』『童子問』は古義堂文庫所蔵「林本」を、『中庸發揮』は同文庫所蔵「元禄十年稿本」を、『古学先生文集』は同文庫所蔵「東涯東所書入本」を原典として用いた。

一、「注釈C—出典その他」は、引用等の出典を中心に記した。なお、『論語』『孟子』『中庸』『大学』の章数は、『論語古義』『孟子古義』『中庸發揮』『大学定本』の分章或いは分段によった。

【論語古義 学而篇第一章】**【原文】**

最上至極宇宙第一論語卷之一

日東 洛陽伊藤維楨古義

学而第一凡十六章

【書き下し文】

最上至極宇宙第一論語卷の一

日東 洛陽伊藤維楨古義

学而第一凡十六章

【現代語訳】

最上至極宇宙第一の書である『論語』第一卷

日本 京都伊藤維楨が古の意を述べる

学而第一 計十六章

【注釈 A—稿本】

「最上至極宇宙第二」 「定本」ではこの八字は削られる。この削除は東涯「古学先生行状」ではある門人（「先哲叢談後編」では荒川景元）の忠告に仁斎が従ったものとする。一般に、この八字は「林本」段階でも総論の部分ではそのまま残されたり、巻之一・巻之三・巻之四では点や傍点で抹消されたりしている。したがって、仁斎自身のこの八字に対する最終的判断は不明である。また「綱領6」には「論語を以て最上至極宇宙第一の書と為し、此の八字を以て諸を毎巻の題目の上に冠す」とある。この文章は、抹消された後、圈点が付されている。三宅正彦氏は、この圈点を復活の印として解釈し、この文章は最終的に残されたとする。これに従えば、すべての巻の始めにこの八字が付されることになる（日本の思想11「伊藤仁斎」筑摩書房、一九七〇、三一六、三二四頁、『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』思文閣出版、一九八七、三二三頁）。

「古義」 「定本」（改訂後）では「述」に作る（東涯「刊謬正俗」編集類に「古人の文字を解するを述と曰ふ」とある）。

【注釈 B—主著】

「最上至極宇宙第二」 「論語」を「宇宙第二」の書とする理由は、『論語古義』綱領6、雍也27大註、「童子問」上五、下四、九、五〇、『語孟字義』附「大学非孔氏之遺書弁」に述べられている。

【注釈 C—出典その他】

「最上至極宇宙第二」 張溥・吳偉業・呂一經編『蘇長公文集』の総目には「蘇長公宇宙第一総目」と題され、その版心題に「宇宙第一文字」とある。吳偉業（一六〇九—一六七二）の序文に「宇宙第一文字とは、

何ぞや。蓋し吾が師張天如先生、蘇長公の文を選びて之に名づくる者なり。……長公の文を以てすと雖も、而れども吾が師の手眼に由りて之が選定を為し以て世に示さずんば、大海洋洋、誰か其の涯に涉らん……」と、張溥（一六〇二—一六四一）の手眼によってこそ蘇軾の文章の偉大さが伝わると言うのは、孔子の手眼により堯舜の治が選ばれたとする仁斎の「祖述」觀との関係で興味深い（新井洋子『蘇長公文集』の編纂にみる張溥と呉偉業の文章觀の一端）『日本中国学会報』四九、一九九七参照。

〔維楨〕 「これえだ」。初名は「維貞（これさだ）」であったが、天和三年（一六八三）三月三日に改名（「日次之覚帳」）。改名の理由は、仁斎と親交があり、延宝六年（一六七八）に非參議從三位に叙された富小路永貞の名を避けたため（『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』六五頁）。

〔日東〕 日本。貝原好古『和爾雅』に「日東は、華人、日本を称して日東と為す。古よりして然り」。

〈学而篇第一章〉

【本文】

子曰、学而時習之。不亦說乎。

【書き下し文】

子ノ曰ク、学んテ時々之ヲ習フ。亦タ説バシカラズヤ。

【小註】

学、倣也、覚也。考諸古訓、驗之見聞、有所倣法而覚悟也。習、溫習也。説、憚也。言既学矣、而時時溫習、則智開道明、猶大寐之頓覚、駁者之忽起、有不堪其說者矣。道之浩々、唯学得以尽之、而非習、則亦不能造其極。故聖人以学為貴、而習為要也。

【書き下し文】

学ハ、倣ナリ、覚ナリ。諸ヲ古訓ニ考ヘ、之ヲ見聞ニ驗シ、倣法スル所有ツテ覚悟スルナリ。習ハ、溫習ナリ。説ハ、憚ナリ。言ふところハ、既ニ学ヒヌ、而シテ時時、溫習スルトキハ、則ち智開ケ、道明ラカニ、猶ヲ大寐の頓ニ覚メ、駁者の忽ち起ツカごとく、其ノ説ビニ堪ヘざる者有リ。道の浩々タル、唯だ

学以て之ヲ尽クスコトヲ得テ、習ニ非ザルトキハ、則ち亦た其の極ニ造ルコト能ハズ。故ニ聖人、学ヲ以て貴と爲、而シテ習ヲ要ト爲。

【現代語訳】

「学」は「ならう」さとするのである。古の訓戒を参考にし、現在の出来事を参照し、お手本に「ならい」、心に「さ」とるのである。「習」は「おさらいする」。「説」は「うれい」。その意味は、「学んだあとに、おさらいを繰り返していくうちに、智慧が開け、道が明らかにになる。それはちょうど昏睡状態からバツと目覚め、不自由だった足が突然立って、たまたまなくうれしい気持ちになるようなものである」。この広大な道は「学」によってのみ尽くすことができる。しかし「習」わなければ、またその至極にまで到ることはできない。だから聖人（孔子）は「学」を尊び、「習」を肝要なこととしたのである。

【注釈A—稿本】

「学、傲也、覚也。考諸古訓、驗之見聞、有所傲法而覚悟」 「第二本」では「学は効なり。効法する所有りて則を取るなり」。「元禄九年校本」では「学は覚なり。見聞する所有りて覚悟するなり」。「元禄十六年定本」では「学は傲なり、覚なり。聖賢の爲す所に傲法して覚悟する所有るなり」。

「習、温習也」 「第二本」では「時習は、時を以て身に熟習するなり。即ち行ひて余力有らば、則ち用て文を学ぶの意」。「元禄九年校本」では「習とは、学ぶ所の者を服行して已まざるなり」。

「道之浩浩……」 以下の議論は「元禄十六年定本」書き入れ段階で初めて現われる（もと「元禄九年校本」「元禄十六年定本」大註にはほぼ同内容の記述）。

【注釈B—主著】

「学、做也、覚也」 「学」が「効」と「覚」の二義を含む点については、『語孟字義』学1。『古学先生文集』四「志学章講義」では「学は覚なり。知らざる所を覚悟するなり」。

「考諸古訓、驗之見聞」 「古訓」を参考にすることを「学」とする例は、『論語古義』為政15大註。「見聞」を「学」の重要な要素とする例は、『語孟字義』学3。「古訓」と「見聞」を対にして用いる例は、『論語古義』為政18大註。

「大寐之頓覺」 同様の譬喩表現は、『童子問』上二。

「道之浩浩、唯学得以尽之」 同内容の発言は、『語孟字義』学2、『童子問』上二一、『論語古義』為政4大註、述而19大註。無窮の「善」は「学問」でなければ尽くせないとする例は、『古学先生文集』二「荀子性惡論」。「道」が無窮なるがゆえに「学」も無窮とする例は、『論語古義』公冶長27大註、述而3大註、述而25大註、『孟子古義』公孫丑2。「道」が浩大無窮なるがゆえに「学」「教」「修」が必要とする例は、『中庸發揮』1、『中庸發揮』18書き入れ。『童子問』下二五では、「道」が浩大無窮なるがゆえに忠信を主とすると言う。また下二八には「道の浩浩たる天を極るまで墮つること罔し」。「論語古義」衛靈公28大註では「道は大と雖も為すこと無く、人は微と雖も知有り……、此れ孔門の学を主とする所以なり」。「古学先生文集」一「送荒川景元赴紀州序」では「吾が聖門の学の若きは、天地と其の大を合し、日月と其の明を合し、……浩浩乎として其れ量る可からざるなり」。

【注釈C—出典その他】

「学、做也、覚也」 『論語集註』に「学の言たる効なり」。「論語注疏」（疏）に「白虎通に云ふ、学は、覚なり。未だ知らざる所を覚悟するなり」。

【習、溫習也】 【論語大全】に引く朱子語に「習は重複溫習なり」。

【大寐之頓覺】 【近思錄】卷二91（張子全書）十四「近思錄拾遺」に「庶くは心を遊ばして浸熟すれば、一日脱然として大寐の醒むるを得るが如きこと有らんのみ」。

【本文】

有朋自遠方來。不亦樂乎。

【書き下し文】

朋有り遠方より來たル。亦た樂しカラずや。

【小註】

朋、同類也。其學足以被乎遠、則君子善與人同之志得遂、而足以見我德之不孤。何樂如之。

【書き下し文】

朋ハ、同類なり。其ノ學以テ遠キニ被ルニ足ルトキハ、則チ君子、善ヲ人ト之ヲ同ジウスルの志、遂グ
ルコトヲ得。而シテ以テ我カ徳の孤ナラザルヲ見ルニ足レリ。何ノ樂カ之ニ如カン。

【現代語訳】

「朋」はなにかまである。その學問が遠く波及していくようであれば、君子が人々とともによき行為を

実践しようという志は実現し、同時に自らの徳が孤立していないことがわかる。この楽しみは他に及ぶものがない。

【注釈A—稿本】

「朋、同類也」 「元禄九年校本」までは、これに続けて「遠方より来たと謂へば、近き者を包みて其の中に在るなり」とある。

「其学足以被乎遠……何樂如之」 「元禄九年校本」は改訂の跡が甚だしいが、学問によって善を人に及ぼせるようになれば、他人も自分に善を告げるようになり、その結果天下の善が一つに集まってきた、その楽しみは極まりがない、という旨が述べられている。

「君子善与人同之志得遂」 「元禄十六年定本」では「人の善に入らんことを欲するの志遂ぐ」。

【注釈B—主著】

「其学足以被乎遠」 「童子問」下五〇では「其の教の遠く被るを見れば、則ち其の道のもと大なることを知る」。「孟子古義」公孫丑上2では「其の道大なる者は、其の伝はること広し」。「古学先生文集」二「漢文帝除肉刑論」では「久遠を経て改む可からず、四方に通じて易ふ可からざるものは、乃ち善の善なる者なり」。

【注釈C—出典その他】

「朋、同類也」 【論語集註】に「朋は同類なり」。

「善与人同」 【孟子】公孫丑上8。

【徳之不孤】 【論語】 里仁25。

【本文】

人不知、而不愠。不亦君子乎。

【書き下し文】

人知ラズ、而ルヲ愠カラズ。亦た君子ナラズヤ。

【小註】

愠、怒也。君子、成徳之稱。言徳備於己、則富貴爵祿、毀譽得喪、一切莫所慕恤。故人雖不知而輕賤之、亦不敢怒。学之至也。蓋其道愈大、則識之者愈少矣。是君子之所以不怒也。

【書き下し文】

愠ハ、怒なり。君子ハ、成徳の稱。言ふところハ、徳、己ニ備はルトキハ、則ち富貴爵祿、毀譽得喪、一切慕恤する所莫し。故二人、知らずシテ之ヲ輕賤スルト雖も、亦た敢ヘテ怒らず。学の至リなり。蓋し其の道愈いよ大ナルトキハ、則ち之ヲ識ル者愈いよ少シ。是レ君子の怒ラざる所以なり。

【現代語訳】

「愠」は「いかる」である。「君子」は徳を身につけた人の称号。その意味は、「徳が自分に備わっていれ

ば、富や位を自分から乞い求めたり、人の評判や得失などを気にしたりすることは一切ない。だから人が自分を理解しないで侮り卑しんでも、決して怒ることはない。学問の極功である。思うに、道が大きくなればなるほど、それに気がつくものは却って少ない。だから君子は自分を理解してくれないことに腹を立てないのである。

【注釈A—稿本】

「言徳備於己」 以下の部分は、「元禄九年校本」では「言ふところは、君子の学は己れの為にす。苟も道に於いて自ら得れば、則ち人の知ると知らざるとは、何ぞ己れに預からん。故に学んで慍らざるに至れば、則ち以て君子と為すに足らん。而して学を為すの功、是に於いて始めて全し」。

【莫所慕恤】

「莫」は「無」に訂正されている。

【注釈B—主著】

「君子、成徳之称」 「語孟字義」君子小人1には「人の上たる者は、其の人宜しく氣象老成、智識遠大、以て天下の儀表と為るに足る。故に其の徳有る者は、其の位無しと雖も、又之を君子と謂ふ」。

【学之至也】

「語孟字義」天命8では「人不知而不愠」を「学問の極功、君子の本分、中人以下の能く及ぶ所に非ざるなり」と解説する。「論語古義」季氏8大註、「孟子古義」梁惠王下16では「命」を知ること

とを「学問の極功」とする。「童子問」中七六では「人を尤めざるに至る、学の至なり」という張載の語を引く。また中五八では「天を怨みず、人を尤めず、下学して上達す」（『論語』憲問37）を「学問の實際」「儒者の心法」「儒者の本領」と評する。下一三では「義」を行いつつ「命」をも知ることを「学問の準的」「学問の極功」とする。下五一では孔子の「祖述」的態度を「学問の極則」とする。

「其道愈大、則識之者愈少」 『論語古義』叙由5では、道の広大さは天地のようなもので、人はその中にいてそれに気づかないとする。『童子問』中五四では逆に「其の道愈いよ大なれば、之を識る者愈いよ衆し」と言う。

【注釈C—出典その他】

「慍、怒也」 『論語注疏』(注)に「慍は怒なり」。

「君子、成徳之称」 『論語集註』に「君子は成徳の名」。

【天註】

此夫子自言其意中之事以勸人也。言適其心則悦、遂其願則樂、皆人情之所同然、而人未知誠悦樂。君子、万人之所仰慕、而人未知誠君子。夫困莫深於不知、患莫大於孤立、辱莫劇於為鄉人。学而時習、則不困焉、茲悦。有朋遠來、則不孤立焉、茲樂。上不怨天、下不尤人、無入而不自得焉、則非啻免為鄉人、是為誠君子矣、而朋來之樂、不慍君子、皆因學而得焉、則學之為功、不其大乎。夫子所以為天地立道、為生民建極、為万世開太平者、其惟學乎。故論語以學之一字、為一部開首。而門人以此章、置諸一書之首。蓋一部小論語云。

【書き下し文】

此レ夫子自ラ其ノ意中の事ヲ言ヒテ、以テ人を勸むるなり。言ふころハ其ノ心ニ適フトキハ、則ち悦ヒ、其ノ願ヲ遂クルトキハ、則ち樂シム。皆人情の同じク然ル所にして、人未タ誠ノ悦樂ヲ知らず。君子ハ、万人の仰慕する所にして、人未だ誠の君子ヲ知らず。夫れ困ハ知らざるより深きこと莫し。患ハ、孤

立するより大なること莫し。辱ハ、郷人爲るより劇なること莫し。学んで時に習ふときは、則ち困します、茲に悦ぶ。朋有り遠く来たるときは、則ち孤立せず、茲ニ樂シム。上、天を怨みず、下、人を尤めず、入るとして自得せざることを無キトキハ、則ち齊ニ郷人爲るを免るるに非ス。是ヲ誠ノ君子ト爲て、朋來の樂、慍らざるの君子、皆学ニ因りて得るときは、則ち学の功爲る、其レ大ナラずや。夫子、天地ノ爲メニ道ヲ立て、生民ノ爲メニ極ヲ建テ、万世の爲メニ太平ヲ開ク所以ノ者、其れ惟だ学か。故ニ論語、学の一字ヲ以て一部ノ開首ト爲。而シテ門人、此ノ章ヲ以て諸ヲ一書の首メニ置ク。蓋し一部ノ小論語ト云フ。

【現代語訳】

これは孔子が日頃考えていることを述べ、それを人に勧めたものである。その意味は、自分の心に一致するものを喜び、自分の願いが実現したならば、それを楽しむ。これは、どちらも人たるものの自然な感情であるが、しかし、そうした歡びに浸っている人は本当の喜び・楽しみを知らないのだ。君子は、万人の仰ぎ慕う対象であるが、人は本当の君子を知らない。いったい、無知であることよりも深刻に困惑することはないし、孤立することが憂いを最も深くするし、田舎者と蔑まれることより屈辱的なものはない。学んで常におさらいすれば、困惑することはないので、大いに喜ぶし、遠くからやってくる仲間がいれば、孤立しないので、心から楽しむことができる。上に向かつては天がなすことを恨まず、下に向かつては人の行いをとがめず、あらゆる状況を自分のものとして満足できれば、たんに田舎者と蔑まれないだけではなく、本当の君子の域に到達し、そして、仲間が訪れる楽しみも、腹を立てない君子の態度も、それらは皆な学問によって得られるのだから、学問の功績というのは、なんと偉大なものではないか。孔子が天地に道を立て、人類に標準を立て、万世に太平を開いたとも言えるほどの、他に類を見ない偉大な存在であるのは、ただその学問ということによるのではないだろうか。だから「論語」は「学」の字から始める

のである。そして、門人たちがこの章を冒頭にもってきたのは、おそらくこの章が論語の世界を凝縮した
いわば小論語に当たると考えたからであろう。

【注釈A—稿本】

この部分、各稿本の改訂のあとが甚だしいために、各稿本の改訂前の全文を掲げる。

【第二本】

「言ふところは、人以て学ぶこと有れば、則ち聰明開発して、事に於いて惑はず。而して時を以て熟習すれば、則ち学ぶ所の者我に在りて、其の悦びに堪へざる者有り。君子既に学びて成就する所有れば、則ち人と之を共にするを願ふ。朋類有りて遠方より來たれば、則ち其の樂しみに堪へざる者有り。道既に成りて人之を知らずと雖も、亦た愠怒する所無し。豈に成徳の君子と為すに足らざらんや。説とは其の好む所に中るを以て言ふ。樂とは心に合すること有るを以て言ふ。言ふところは、人にして学ばざれば、則ち以て人と為す可からず。既に学びて、以て人に及ばすに足らざれば、則ち之を学と謂ふ可からず。而して知られずして愠らざるに非ずんば、則ち亦た以て君子と為すに足らず。故に夫子次第して之を言ふ。其の意深切なり。夫子の、天地の化育を知り、生民の命脈を立て、能く前聖の統を継ぎて、万世をして無窮ならしむる所以の者は惟だ其れ学のみ。故に門人此の篇を以て一書の初めと為して、此の章を以て一篇の首と為す。蓋し一部の小論語と云ふ。学者忽せにす可からず」。

「元禄九年校本」

「此れ夫子、自ら其の意中の事を言ひて、以て人に勧め勉めしむるなり。蓋し悦樂は人の願ふ所にして、

人未だ其の悦樂を知らず。其の名づけて君子と為す者、未だ必ずしも真の君子と為さず。夫れ悦びは學を悦ぶより深きもの莫く、樂しみは善を樂しむよりも大なるもの莫し。天下の物、以て之を易ふること能はず。此を名づけて真の悦樂と曰ふなり。君子は其の位に素して行ひ、其の外を願はず。上、天を怨みず、下、人を尤めず。世を遷れ知らずして之を悔いず。此を名づけて真の君子と曰ふなり。苟も此を識りて後、世世の所謂悦樂、其の名づけて君子と為す者、皆な淺近凡庸にして以て比と為すに足らず。夫れ道の浩々たる、惟だ學のみ以て之を明らかにするを得。而るに習に非ずんば、則ち亦た以て其の妙を尽くすこと無し。故に君子は學を以て貴しと為して、習を以て要と為す。學の為さざる可からずして、功の勤めざる可からざるや、此くの如し。而して朋來たるの樂しみ、慍らざるの君子は、皆な學に由りて得れば、則ち學の功爲る、其れ大ならずや。夫子の天地の爲に極を立て、生民の爲に道を立て、万世の爲に太平を開く所以の者は、其れ惟だ學か。故に門人此の篇を以て一書の初めと為して、此の章を以て一篇の首と為す。蓋し一部の小論語と云ふ。

「元祿十六年定本」

「此れ夫子、自ら其の意中の事を言ひて、以て人に勧め勉めしむるなり。言ふところは、其の心に適へば則ち悦び、其の願ひを遂ぐれば、則ち樂しむ。皆な人情の同じく然る所にして、人未だ誠の悦樂を知らず。君子は万人の仰ぐ所にして、人未だ必ずしも誠の君子を知らず。夫れ悦びは學を悦ぶより深きもの莫く、樂しみは善を樂しむよりも大なるもの莫し。天下の物、以て之を易ふること莫きなり（原本には削除されるはずであつたと思われる「不能」の二字が残っている）。君子は其の位に素して、其の外を願はず。上、天を怨みず、下、人を尤めず、入るとして自得せざる無し。至れり。困しみは知られざるより深きもの莫く、患ひは孤立するより劇しきもの莫く、辱は郷人より大なるもの莫し。學びて時に習へば則ち困しまず、

茲に悦ぶ。朋有りて来たれば則ち孤立せずして、茲に楽しむ。人知らずして慍らざれば、則ち誠の君子為り。畜に郷人爲るを免るのみに非ず。夫れ道の浩大なる、惟だ学のみ以て之を明らかにするを得。而るに習に非ずんば、則ち亦た以て其の極に造ること無し。故に君子は学を以て貴しと爲して、習を以て要と爲す。学の爲さざる可からずして、功の勤めざる可からざるや、此くの如し。而して朋来たるの楽しみ、慍らざるの君子は、皆な学に由りて得れば、則ち学の功爲る、其れ大ならずや。夫子の天地の爲に極を建て、生民の爲に道を立て、万世の爲に太平を開く所以の者は、其れ惟だ学か。故に論語の学の一字を以て一部の開首と爲すは、猶ほ孟子の仁義の二字を以て開卷の第一義と爲すがごとし。門人此の章を以て一書の首に置くは、蓋し一部の小論語と云ふ」。

なお、「元禄九年丙子四月廿二日」の日付をもつ『古学先生文集』四「諸友為余賀七袞宴集講義」は、この「学而」第一章の講義で、その前半部分は「元禄九年校本」と「元禄十六年定本」の中間に位置する内容となっている。

『夫困莫深於不知……茲業』 「定本」では「故に学びて時に習へば、則ち得る所日に熟す。是を誠の悦びと爲す。朋有り遠方より来たれば、則ち善、人と同じうす。是を誠の楽しみと爲す」。

【注釈B—主著】

「学之為功、不其大乎」 天下で学問の功より大きなものはないという考えは、『論語古義』陽貨7大註、『孟子古義』離婁上1、『童子問』上二〇。『古学先生文集』二「荀子性惡論」では、孔子の聖が堯舜に賢る理由は「学問の功の大」のためだとする。

「夫子所以為天地立道、為生民建極、為万世開太平者、其惟学乎」 孔子が古今・天人を見、生民のために「学」という大教法を建てたという考えは、『童子問』上一七。「孔子の万世の爲に学問を開く所以」と

いう語は、『論語古義』衛靈公38大註。学問・教法の目的は、天下の為に太平を開くためという考えは、『論語古義』為政4小註、『童子問』中七三。

『論語以学之一字、為一部開首』 『古学先生文集』五「私擬策問」（寛文元年十二月十八日）に「学の一字は魯論開首の第一義にして、実に夫子の堯舜に賢る所以」。

【注釈C—出典その他】

「上不怨天、下不尤人」 『中庸』14。

「無人而不自得焉」 『中庸』14。

「夫子所以為天地立道、為生民建極、為万世開太平者、其惟学乎」 「天地の為に心を立て、生民の為に道を建て、去聖の為に絶学を継ぎ、万世の為に太平を開く」は『近思錄』二95（『張子語録』中）。

（一九九九年十月一日 受理）